

# 九州大学 大学史料室ニュース

第16号

2000. 10. 31.

## 目 次

九州大学の「図書館・博物館・文書館」について… 2
大正～昭和初期の福岡県下の高等教育機関 — 専門学校・実業専門学校Ⅱ — …… 3
九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿… 6
九州大学大学史料室名簿… 6
受贈図書一覧… 6
大学史料室日誌抄録… 8



医学部集合写真（1923年頃）

1923年（大正12）頃の写真である。前2列中央に真野文二総長（右）と高山正雄医学部長（左）が見えるので、卒業に際してのものとして推測される。当時の医学生の様子が知られるが、注目されるのは現代中国を代表する作家・政治家である郭沫若の若き日の姿が見られることであろう（前2列左から2人目。制帽を阿弥陀に被っている）。郭沫若（1892～1978。本名郭開貞。中国四川省楽山県出身）は、1914年（大正3）来日、1918年、旧制六高から本学の医科大学に進み、23年、卒業した。学生時代より文学に親しみ、医業を断念。以後、文学、歴史研究、政治活動に邁進した。戦後の1955年（昭和30）12月、中国科学院院長の郭沫若は32年ぶりに母校（医学部）を訪ねて恩師、級友と再会。講演を行って本学学生・教職員に大きな感銘を与えた。



# 九州大学の「図書館・博物館・文書館」について

松下志朗

## はじめに

九州大学のことだけではないが、大学の内実とその環境の変化があまりにも目まぐるしく、異なった環境下にある私にはそのことが理解できない。もちろん経済学部在職中も大学行政の中核にいたことはなく、ただ大勢に流されてなんとか時間を稼いできた私が批評がましいことを言える立場にはない。そのことを前提にして、やはり素朴な形で疑問に思うことを述べないと腹膨れる感じがあるので、そのことを徒然なるままに書き記すが、部外者の戯言として軽く御一読くだされば幸せである。

一言申し上げたいのは、大学の研究・教育補助機関としての図書館・博物館・文書館についてである。総論的に言えば、九州大学が収蔵する資料（図書も含む）について、どのように研究・収集・整理・保管する体系を作りあげるかは、大学の基本的な問題であり、新キャンパスへの移転という変動期にさいして抜本的に再考する必要がある。ここで「抜本的に」と言うのは、資料を管轄する諸部局・機関の枠をはずして、在るべき理想の姿を専門家であるかいかを問わずに明断な形で議論すべきであって、そこでは既存のもの業績・伝統を十分に尊重することは大事であるが、そのことと現在の諸部局・機関の利害関係を混同すべきではない。今から述べることは、現在統廃合の作業がなされている経過を無視して、本来在るべき姿を私なりに提示して、記録に留めておきたいからである。

## 資料収蔵・研究機関の3本柱

九州大学現存の資料収蔵・研究機関を抜本的に効率よく運営するためには、九州大学総合資料（情報を含む）センターを構想すべき段階にきていると考える。新キャンパスの中心に立地して、九州大学が収蔵する全ての情報にアクセス出来るような総合センターの設置である。それは既存の施設とスタッフを有機的に構成すれば、新規予算・人員を要求しなくても可能であろう。その基本的な構成単位は、（1）図書館（2）博物館（3）文書館である。

（1）図書館は「図書をはじめとする記録情報

を収集・蓄積し、利用しやすい形に整序或いは加工して、求めに応じて検索し、利用に供する」（平凡社『大百科事典』）機関であるという。九州大学の図書館もその原義にかえて新しい姿を模索すべきである。現在九州大学では図書館が中心にあつての大学というイメージが非常に弱い。「附属」図書館と言う名称自体にも、そのことが象徴されている。したがって図書館学をはじめとする研究者を内部にもたず、研究機能を備えていないことは全国の大学図書館に共通する課題であるといえ致命的な問題である。

現在日本の置かれている社会状況からみるならば、情報のネットワークの役割も要請されており、そこにも研究機能を持たせるべきであろう。現在京都大学などでも総合研究の立場から図書館機能の集中方式的機能充実が問題とされてくるようになったが（『京都大学附属図書館報』35巻4号、1999年3月）、そのためには各学部の壁を取り払って全学の図書を集中し利用しやすい形に整序・公開すべきであろう。

（2）博物館については、九州大学においても総合研究博物館が発足したという。「総合研究博物館は湯川館長はじめ職員8名で組織され、九州大学の教育・研究等の成果の公開・展示や、1世紀になろうという九州大学の歴史の中で蓄えられた数多くの貴重な学術標本・資料等の保存、管理体制の整備」（『九大広報』13号、2000年7月）を図るといふ。それについては、私の在職中数年にわたって総合資料館設置準備委員会で概算要求を検討したことがあるが、新キャンパスへの移転をまえにして九州大学創設いらいの貴重な博物館的資料が失われるのではないかと憂慮されており、当然のことながらその事態への対応が早急になされる必要があるのではないか。現状は自然科学系・人文科学系・社会科学系等の諸分野にわたる多くの資料が、諸部局・機関に分かれて保管されており、そこに統一した基準がないために、その保管（ないしは廃棄）については各部局・機関の判断に委ねられている現状である。それらの資料を保全するためにも基本的には各部局・機関の壁を取り払った形で資料収集の努力が必要であり、提供されないものについては敢えてレプリカ作成も考



慮することが必要となろう。

いずれにしても九州大学の研究軌跡を系統的に資料を通じて知り得、将来の展望を開くためにも、研究機能は重視されるべきである。博物館の運営はえてして専任教官の関心なり専門に引き付けられがちな悪弊があるが、九州大学の将来をうらなう点からもその活動が期待されるどころである。

(3)文書館は、現在九州大学で実現されていない唯一の研究機関である。公文書館法が制定されたにもかかわらず、地方自治体の対応は鈍く、大学にいたっては関係教官の認識も薄い。九州大学には各部局・機関で収集された資史料が大量に保管されているが、各部局・機関の壁によって有機的な活用が妨げられているといっても過言ではなからう。全国の大学に共通することではあるが、前近代史料・近現代資料・大学資料等の資史料が、諸部局・機関に分有されたまま、その研究・利用にあたっては、非常に効率の悪いものとなっている。しかも大学組織の改変にしたがって本来の姿とは異なる離合集散が行われていて、どのような事情によるものか判然としないところが多い。例えば前近代の史料群を大量に収蔵する研究施設がさほど関連があるとは考えられない部局の附属施設として移動し、さらに総合博物館へ併合される経緯は外部の私どもには判りづらいことである。

九州大学の改革は開学以来その例をみない大が

かりなものであり、キャンパス移転も絡んで変動の幅が大きいだけに対応も千変万化して、関係者は苦慮されることが多いと思うが、しかしそれだけに時にはシンプルに原点に立ち帰る勇気も必要であろう。個々の構想が議論されるときは、すくなくとも理想的なあり方へのどの階梯にあるのかを位置付けて、それから現実的な見地からの問題提起が必要であろうと考える。

(4)九州大学の図書館・博物館・文書館を、総合的に運営する場所として、「九州大学総合資料センター」を設置することも考えられているのではないか。

新キャンパスの構想はすでに決定されているのかどうか私は知らないが、この総合資料センターは、図書館・博物館・文書館を同一ゾーンにサテライト方式で配置して、3セクターに有効にアクセス出来るようにする必要がある。中心部分に資料検索のための情報センターが設置されれば、資料利用の有効性が高まるだろう。そこに収納される資料は、原則的には全学よりプールされて、資料収集や保管・整理・閲覧・研究等の効率を良くする。それと同時に全学的に資史料を集中するとすれば、従来の各部局・機関による重複購入を避けることもできる。また情報センターについては、九州地区共用施設とすることも考えられよう。

(九州大学名誉教授・福岡大学商学部教授)

## 大正～昭和初期の福岡県下の高等教育機関

### －専門学校・実業専門学校 II－

折田悦郎

#### 九州医学専門学校

昭和3年(1928)2月、文部省告示第68号により、九州医学専門学校が久留米市小森野町に創設された。当時、福岡県には既に九州帝国大学医学部が存在していたが、医学先進県として開業医の数も多かった県内の医師会には、子弟教育に対する要求等から、早急に実地医家の養成機関(専門学校)を創設すべきだとの声が上がっていた。昭和2年7月、県医師会長溝口喜六らによる医学専門学校創設案の記事が「福岡日日新聞」紙上に載せられると、久留米市、福岡市、小倉市、若松市、佐賀県鳥栖市に誘致運動が起こった。

このうち最後まで残ったのが、久留米市と福岡市で、両市は互いに病院建物、敷地、基金等の寄付条件を提示して、誘致合戦を繰り広げた。この争いは斎藤守園福岡県知事や、福岡県出身の山崎達之輔文部次官、菊竹淳福岡日日新聞主筆等の仲介・調停でもなかなか結論が出ず、一時は男子部を福岡に、女子部を久留米に置くという折衷案まで出されたが、女子部案は立ち消えとなり、結局、昭和2年11月の第4回創立委員会総会の決戦投票で、久留米市側に軍配が上がった(21票対11票、白票2)。設立地が久留米市に決まると、今度は同市内での敷地争奪戦が起こったが、この問題に

については、地元産業界の日本足袋株式会社社長石橋徳次郎が、弟正二郎とともに敷地・校舎の寄付を申し出て決着が着いた。こうして、全国唯一の地方医師会構想による九州医学専門学校が創設されたのである。

初代理事長は、福岡市の外科医で大正8年(1919)4月から第4代福岡県医師会長を務めていた溝口喜六、初代校長兼病院長は、九州帝国大学名誉教授の伊東祐彦\* (写真)で、ともに九州医学専門学校の創設に大きな役割を果たした。

第1回の入学試験は、昭和3年(1928)4月、久留米市の県立中学明善校と東京の早稲田大学で行われた。試験は英語(または独語)、数学、物理、国漢の学科700点に、人物考査200点、体格検査100点の合計1,000点満点で行われ、人物、体格検査の比重が高い試験であった。入学者172名に対し受験者1,250余名、実質競争率7.3倍という難関である。入学者は福岡県の80名を筆頭に、佐賀14名、長崎・熊本各8名と九州出身者が中心であったが、四国、関西からの入学者もいた。

医学教育に必須の実習病院は、従来の久留米市立病院が九州医専の附属病院として移管され、開学とともに診療・研究活動も始まった(『久留米大学五十年史』)。

### 九州歯科医学専門学校

戦前期における歯学教育の歴史は、国家の手厚い保護を受けた医学教育の歴史と比較をすれば、極めて対照的な変遷を辿っている。それは、江戸時代以来の伝統を持つ医学教育が、帝国大学や官立の医学専門学校を中心に行われたのに対し、歯学教育の場合、基本的には私立の専門学校で行われたことに象徴的に現れている。戦前期に置かれた官立の歯学専門学校は東京高等歯科医学校(東京医科歯科大学の前身)のみであり、創設された時期も、昭和に入ってからのものであった(昭和3年10月、勅令第239号)。

大正3年(1914)4月、福岡市因幡町に設立された九州歯科医学校は、現在の福岡県立九州歯科大学(現住地は北九州市小倉北区)の前身にあたるが、同校もまた、最初は私立学校として始まった。設立者は口腔外科学博士の国永正臣。国永は福岡県京都郡の出身で、東京の高山歯科医学院等に学んだ後、福岡県若松市に開業。明治35年(1902)、米国イリノイ州立大学歯学部留学し、同43年(1910)の帰国と同時に福岡市で歯科医院を開業していた。

九州歯科医学校の校種は各種学校で、学科は別科と本科に分かれ、修業年限はそれぞれ2年間であった。入学定員は80名。大半を福岡県出身者が占めたものと思われる。大正5年(1916)3月、第1回の卒業式が行われたが、厳しい卒業試験の影響もあって、卒業者は28名という少数にとどまっている。以後、同校は第3回までの卒業生を送り出したが、大正10年(1921)に国家試験資格問題が起こり、同年7月、専門学校令に基づく九州歯科医学専門学校に昇格することになった(文部省告示417号)。これは、大正10年10月より歯科医師試験規則の改正が予定されており、従来の各種学校には受験資格が無くなることから取られた措置であった。この昇格で九州歯科医学専門学校の歯科医師養成機関としての基礎が固まった。

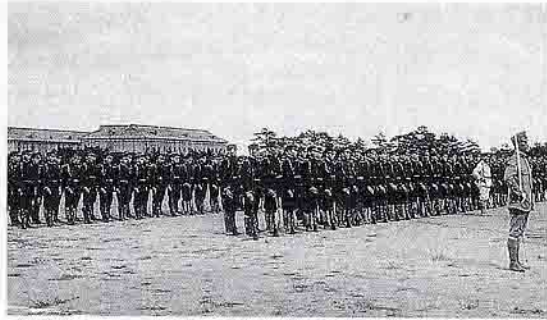
財団法人九州歯科医学専門学校の初代校長は九州歯科医学校同様、国永正臣であった。修業年限は3年間で、1年間の研究科も付随していた。学生定員は1学年80名。大正10年9月、第1回の入学式が行われ、51名が入学している。これ以降同校では、西日本唯一の歯科医師養成機関として、本格的な教育活動が開始された。

しかし、大正13年(1924)12月、校舎の福岡市今泉への移転を契機として財政問題が表面化し、国永と他の理事間に対立が生じると、九州歯科医学専門学校の運営は深刻な危機を向かえることになった。この対立はやがて内紛の様相を呈するようになり、学生、福岡市、文部省を巻き込んで昭和5年(1930)頃まで続いたが、双方の責任者が退任すること等で決着を見、昭和6年3月から、新しい体制での学校運営が始まった(『九州歯科大学五拾年史』)。

### 明治専門学校の官立移管

明治40年(1907)7月、安川敬一郎・松本健次郎父子の提供した金330万円、敷地約7万8,700坪をもって、福岡県遠賀郡戸畑町の地に創設された私立明治専門学校は、3年制が一般的であった時代、卒業生に工学士を付与する4年制の実業専門学校として、創立以来独特の教育を行っていた。そこでの教育は、初代総裁山川健次郎\*\* (写真)の方針によって、基礎と実験が、また科目としては英語と体育(兵式体操。写真)が重視され、入学者は九州を中心に西日本一帯に及んでいた。大正2年(1913)3月、第1回の卒業式が挙行されたが(卒業者数44名)、このとき宮内省から下賜金(3,000円)が支給され、翌年から入学志願者





明治専門学校兵式体操（教練）

が急増している（大正3年度～大正9年度の平均競争率約7倍）。大正6年（1917）6月には、中国人学生7名を受け入れ、以後毎年のように留学生の受入れを行った。

ところで、大正7年12月、大学令が公布され翌年4月から施行されたが、この大学令の公布をきっかけに、明治専門学校では卒業生、生徒の間に専門学校から大学への昇格を目指す、いわゆる大学昇格運動が起こった。大学への昇格は、中央の大手私学等においては明治期以来の希望であり、実際、大正九年以降、いくつかの私立専門学校が大学への昇格を果たした。このような動きを背景に、大学令施行の年がちょうど開校10周年にあっていた明治専門学校の昇格運動は、一時盛り上がりを見せたが、しかし、主に財政的な理由によって失敗に終わった。

明治専門学校の経営は、第一次世界大戦中の物価急騰等によって悪化の一途を辿っており、創設者の安川敬一郎は、大正7年に維持資金等81万円、同8年には経常費6万円、同9年には同じく経常費1万円の寄付をして、同校の財政を支えていた。しかし、大戦後の大正9年（1920）3月には、いわゆる戦後恐慌が起こり、安川敬一郎、山川健次郎等の明治専門学校首脳陣は、同校を国へ献納することを考えるようになった。この献納案に対しては、明治専門学校卒業生・同教職員による献納反対の動きや、九州帝国大学総長真野文二による九大への寄付案が出されたが、結局は大正10年3月、高等諸学校の拡張計画に基づき実業専門学校等を増設中であった文部省の認めるところとなり、私立明治専門学校は同年4月から官立に移管されることとなった（勅令第49号。移管直前の同校には、採鉱学科、冶金学科、機械工学科、応用化学科、電気工学科の5学科に、約60名の教職員と277名の学生が在籍していた）。明治42年（1909）の開校以来、大正9年（1920）度までの12年間に、私立明治専門学校が受け入れた入学者は824名、



伊東 祐彦



山川健次郎

うち約半数の443名を卒業生として世に送り出している（野上暁一『明治専門学校40年の軌跡』）。

なお、ここで昭和初期（昭和5年度）当時の福岡県下高等教育機関の概要を示しておく、専門学校4校、実業専門学校1校に教員178名、生徒2,012名があり、その外、九州帝国大学に265名の教員と1,956名の学生・生徒、中等学校教員養成機関の第八臨時教員養成所（九州帝大に附設）に11名の教員と23名の生徒、福岡高等学校に44名の教員と575名の生徒がいた（合計で校数7、教員数498名、学生・生徒数4,566名）。これは学校数では東京、京都、大阪、愛知に次ぎ、教員・学生・生徒数では東京、京都、大阪に次ぐ、全国第4位の規模であった（『日本帝国文部省第五十八年報』上、下より累計）。

九州帝国大学を頂点として、高等学校、実業専門学校、専門学校を有した福岡県の西日本における地位を知ることが出来る。

（大学史料室専任講師）

注

\*伊東祐彦 慶応1年（1865）8月17日～昭和11（1936）年10月6日。小児科学者。九州医学専門学校初代校長。旧米沢藩士伊東祐順の長男。明治25年（1892）7月帝国大学医科大学卒業。同28年1月福岡県立病院小児科部長。同34年4月独逸留学。同37年6月京都帝大福岡医科大学教授。九州帝大医科大学長、附属医院長等を歴任。昭和2年（1927）11月九州帝大名誉教授。疫癘研究等でわが国の近代小児医学の基礎を築いた。

\*\*山川健次郎 安政1年（1854）7月17日～昭和6年（1931）6月26日。物理学者（わが国最初の理学博士の1人）。明治専門学校総裁。初代九州帝大総長。旧会津藩家老山川尚江の3男。明治5年米国エール大学留学。帝国大学理科大学長等を経て、同34年（1901）6月東京帝大総長。同44年（1911）4月九大総長（～大正2年5月）。大正2年（1913）5月再度東大総長（大正3年8月～同4年6月兼京都帝大総長）。明治37年8月貴族院議員（勅撰）。大正4年12月男爵。同12年2月枢密顧問官。



九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿

委員長	○人環院	教授	新谷 恭明	歯病	教授	池本 清海
副委員長	○医	教授	井上 尚英	図書館	館長	有川 節夫
〃	○石炭研	教授	東定 宜昌	生環	七助	北野 雅治
	○人文院	助教授	佐伯 弘次	熱研	助教授	林 静夫
	○比文院	教授	有馬 學	アイ	七教	大崎 進
	○法	教授	植田 信廣	中央分析	助教授	坂下 寛文
	○経	教授	荻野 喜弘	遺伝情報	教	服巻 保幸
	言文院	教授	松原 孝俊	留	七助	清水 百合
	○理	教授	青木 義和	有化研	助教授	稲永 純二
	数理院	教授	佐藤 榮一	大教	七助	長野 剛
	歯	教授	坂井 英隆	先端	七教	間瀬 淳
	薬	教授	前田 稔	アドミ	教	武谷 峻一
	工	教授	井澤 英二	博物館	助教授	中牟田義博
	シ情院	助教授	正代 隆義	○基盤	七教	廣川佐千男
	総	助教授	龍 有二	健	七助	一宮 厚
	○農	教授	村田 武	医短	教	中野 武彦
	生医研	教授	中山 敬一	副学長		柴田洋三郎
	応	教授	佐藤浩之助	事務局長		渡辺 弥
	機能研	教授	小山 繁			
	医	教授	野瀬 善明			

○は専門委員会委員  
(2000年10月1日現在)

九州大学大学史料室名簿

室長	人環院	教授	新谷 恭明	兼任	経	院	教授	荻野 喜弘
専任		講師	折田 悦郎	〃	石炭研	教授	東定 宜昌	
兼任	人文院	助教授	佐伯 弘次	事務補佐員			馬場 恵	
〃	比文院	教授	有馬 學	〃			筑紫 啓子	
〃	法	教授	植田 信廣					

(2000年10月1日現在)

受贈図書一覧 (2000年1月～2000年6月)

陸軍と海軍 陸海軍将校史の研究	(1974年4月～1994年3月)	田代英雄教授退官
山口宗之	2000. 3	記念
九州大学 多田功教授退官記念誌		九州大学歯学部口腔外科学教室同門会
多田功教授退官記念事業会	2000. 3	1994. 6
九州大学 磯矢 彰教授 最終講義 加速器と共に		田代英雄教授退官記念 寄稿文集
磯矢教授退官記念事業会	1985. 5	九州大学歯学部口腔外科学第1講座 1994
九州大学歯学部口腔外科学教室業績目録	田代英雄教授就任10周年記念	九州大学医学部歯科学口腔外科学教室業績目録
九州大学歯学部口腔外科学教室同門会		藤野 博教授開講15周年記念
	1984. 11	九州大学医学部歯科学口腔外科学教室同門会
九州大学歯学部口腔外科学第1講座業績目録		1970. 11
		藤野 博教授業績目録
		九州大学歯科口腔外科同門会
		1974. 3

- 上田誠之助先生叙勲記念  
上田誠之助先生叙勲記念会 1992. 7  
日本酒の起源 カビ・麴・酒の系譜  
上田誠之助 1999. 10  
MOLECULAR TARGET FOR HEMATOLOGICAL  
MALIGNANCIES AND CANCER  
Yoshiyuki Niho et al.ed. 2000  
Molecular and Genetic Approaches to Diseases  
- Immunology, Hematology and Oncology -  
Yoshiyuki Niho et al.ed. 1998  
内科学進歩のトピックス  
仁保喜之・石橋大海編 1998. 4  
古賀利郎先生論文集  
2000. 1  
心筋障害をめぐる問題点  
中村元臣編 1985. 11  
循環器疾患実地診療メモ  
中村元臣監修 1989. 11  
九州大学医学部昭和44年卒業生同窓会「獅子の会」  
30周年記念アルバム  
九州大学医学部昭和44年卒業生代表同窓会会長  
古山正人 1999. 12  
易水 湯川又夫先生追想録  
湯川又夫先生追想録刊行会編 1959. 10  
本江元吉退官記念随筆集 うたかた  
本江元吉 1977. 6  
虹の松原 - ヘルマン・ヘッセと共に  
岩本 桂 1999. 10  
図書館人生五十年  
木村秀明 1998. 10  
中尾武徳遺稿集・戦没学生の手記 探求録  
中尾義孝編 1997. 5  
構造解析学人物史談  
成岡昌夫 1999. 3  
筑波大学前史資料調査室ニュースレター 第2号  
筑波大学前史資料調査室編 2000. 5  
福井県立大学情報センター所蔵『大学問題(大学・  
教育・学問・科学技術)関連の雑誌記事(1950年  
代後半から1960年代を中心に)』について(その1)  
(福井県立大学論集第16号)  
高橋正立 2000. 2  
BUTSUDAI 10号  
佛教大学 2000. 4  
金沢大学資料館だより 第15号  
金沢大学資料館編 2000. 2  
サティア《あるがまま》 第36号～第38号  
東洋大学井上円了記念学術センター編  
1999. 10、2000. 1、2000. 4  
成瀬記念館 1999 No. 15  
日本女子大学成瀬記念館編 1999. 12  
日本女子大学学園史ニュース 第3号  
日本女子大学成瀬記念館編 2000. 1  
日本女子大学史資料集 第六 新制日本女子大学  
成立関係資料-GHQ/SCAP文書を中心に-  
日本女子大学成瀬記念館編 2000. 3  
新島研究 第91号  
同志社社史資料室第一部門研究 2000. 2  
同志社談叢 第20号  
同志社大学人文科学研究所同志社社史資料室編  
2000. 3  
新島襄・同志社ゆかりの碑  
同志社大学人文科学研究所同志社社史資料室編  
2000. 5  
校史 Vol.10  
國學院大學校史資料課 2000. 3  
学習院大学五十年史ニュース 第5号  
学習院大学五十年史編纂室編 2000. 3  
神奈川大学史資料集 第十六集 法学科増設認可  
申請書  
大学資料編纂室編 2000. 3  
関西大学年史紀要 第十二号  
関西大学年史編纂委員会編 2000. 3  
関東学院学院史資料室ニュース・レター 第2号  
関東学院学院史資料室 2000. 4  
宮城学院資料室年報 『信・望・愛』 1999年度  
第6号  
宮城学院資料室運営委員会 2000. 3  
東京大学史史料室ニュース 第23号  
東京大学史史料室編 1999. 11  
The University of Tokyo 1877-2000:A History  
-21 Short Stories in Pictures-  
Archives Section of the University of  
Tokyo ed. 2000. 3  
南山大学五十年史 写真集  
南山大学50年史作成小委員会編 1999. 10  
立教学院百二十五年史 資料編 第4巻～第5巻  
立教学院百二十五年史編纂委員会編 2000. 3  
BRICKS AND IVY 立教学院百二十五年史 図録  
立教学院百二十五年史編纂委員会編 2000. 3  
大学アーカイヴズ No.22  
全国大学史資料協議会東日本部会 2000. 3  
[凡例]  
掲載したのは受贈図書の一部である。



大学史料室日誌抄録 (2000年1月～2000年6月)

1. 20 (木) 第21回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。  
平成12年度教官定員運用要望書提出。
1. 21 (金) 旧教養部文書、大学史料室へ移管。
2. 4 (金) 中村元臣名誉教授より史料寄贈。  
農学部附属演習林より史料調査のため来室。  
折田講師、文化財ワーキンググループ出席。
2. 22 (火) 田代英雄名誉教授、史料寄贈のため来室。
2. 23 (水) 中島孝夫理学研究科教授より史料寄贈。
2. 25 (金) 退官予定教官へ史料寄贈依頼文書発送。  
上田誠之助名誉教授、史料寄贈のため来室。
3. 6 (月) 第22回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。
3. 7 (火) 園田五郎健康科学センター教授より史料寄贈。
3. 8 (水) 高木靖文名古屋大学教授、大学史料室視察のため来室。
3. 24 (金) 平成13年度概算要求事項表提出。
3. 25 (土) 二見剛史志学館大学教授、史料調査のため来室。
3. 29 (水) 石橋大海医学系研究科助教授より史料寄贈。
3. 31 (金) 『大学史料叢書』第8輯、『大学史料室ニュース』第15号、『大学史料の情報資源化と大学アーカイブスのシステム開発に関する基礎的研究』、『試行授業「大学とは何かーともに考えるー」の記録』刊行。
4. 4 (火) 新谷恭明委員長、情報公開ワーキンググループに列席。
4. 6 (木) 第25回大学史料室運営委員会開催。
4. 10 (月) NHK福岡放送局より戦前期九州帝国大学入学式の件につき照会、史料送付。
4. 14 (金) 折田講師、2000年度前期全学共通教育科目「九州大学の歴史」開講。
4. 17 (月) 上村弘雄名誉教授より史料寄贈。
4. 19 (水) 大学史料室兼任教官等による2000年度前期全学共通教育科目「大学とは何かーともに考えるー」開講。
4. 27 (木) 第23回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。  
平成13年度概算要求各部局説明聴取(新谷委員長出席)。
4. 28 (金) 天児和暢名誉教授より卒業式総長告辞の件につき照会。  
山本輝雄福岡国際大学教授より史料寄贈。
5. 1 (月) 西日本新聞社記者、『大学史料叢書』取材のため来室。
5. 2 (火) 学務部学務課より史料受領。
5. 16 (火) 石炭研究資料センターより産業労働研究所看板を受領。
5. 24 (水) 総務課総務掛より文化勲章受章者の件につき照会。
5. 26 (金) 羽田貴史広島大学高等教育研究開発センター教授、史料調査のため来室。
5. 30 (火) 福田淳一名誉教授より史料寄贈。
6. 7 (水) 予算経理委員会開催(新谷委員長出席)。
6. 12 (月) 大学院人文科学府院生、史料調査のため来室。
6. 14 (水) 六甲出版、写真史料借用のため来室。
6. 26 (月) 留学生課より郭沫若の件につき照会。
6. 28 (水) 山口宗之名誉教授より史料寄贈。
6. 29 (木) 評議会開催(平成12年度大学史料室予算決定)。
6. 30 (金) 総務課秘書掛より史料受領。

九州大学大学史料室ニュース 第16号

発行日 2000年10月31日(年2回刊)

編集発行 九州大学大学史料室  
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
電話・FAX (092) 642-2292

Archives of Kyushu University

印刷 (株)ミドリ印刷